

国際ボランティア学会

ニュースレター N0.6

2003年2月7日

国際ボランティア学会事務局

〒565-0871 吹田市山田丘 1-2

大阪大学人間科学部ボランティア人間科学講座内

Tel & Fax : 06-6879-8064

《内容》

はじめに 第4回大会を終えて

1. 第4回大会の報告
2. 第4回総会の報告
3. 第3回隅谷三喜男賞について
4. 役員選挙について
5. 『ボランティア学研究』について
6. 会費納入のお願い
7. 事務局より

第4回国際ボランティア学会大会を終えて

〔事務局長 内海成治〕

2002年はアフガニスタンで始まり、イラクと北朝鮮で終わるようである。20世紀の最後の10年間に燻っていた問題が急速に動き出したかのようである。こうした国際情勢の変化に国際ボランティアの関係者も無関係にいることはできない。私自身、今年は4月から3回にわたってアフガニスタンに短期滞在し、11月下旬から1年の予定でカブールに赴任した。赴任の前には、アフガニスタン支援をめぐって関係省庁やJICAそしてNGOの方々と話をする機会が多かった。

そうしたなかで2つのことを強く感じた。ひとつは、アフガニスタン支援のような紛争の継続している地域での国際協力、国際ボランティアは、これまで以上に多様な取り組みを必要としているということである。今ひとつは、アフガニスタンのようないわば忘れられた地域に関する研究の希薄さである。アフガニスタンに関する研究は東南アジアの諸地域と比べて本当にわずかな文献しかないということである。私はアフガニスタンへの教育支援を担当しているのであるが、統計データも足りないのであるが、教育に関する研究は5指に足りないくらいである。

21世紀は国際協力・国際ボランティアの時代となることが予想されるのであるから、地域研究や事例研究、各分野の調査研究も含めて戦略的に基礎的な研究を進めていくことの重要性を痛感した次第である。この意味で、国際ボランティア学会の責務は大きいのである。

第4回国際ボランティア学会の大会は、10月27日と28日の両日、大阪YMCAを会場として行われた。大会は創立大会を含めて5回目にあたる。大阪YMCAはJR大阪駅にも近く、地下鉄の駅も近くにある地理的に大変便利な所であった。

今井鎮雄先生の講演「国際ボランティアの過去・現在・未来」はわれわれの知らない戦前からのボランティアの歴史から将来への展望までを、先生ご自身の人生と重ねられた熱い講演であり、大きな感銘を与えた。

また、今回の大会は、課題研究を設けずに自由研究を中心に行ったが20におよぶ自由研究発表が行われた。特に大学院の若い方の発表が充実していた。研究発表は会員相互

の啓発の場でもあり、活発な発表と討論が行われたことは、学会の発展をうかがわせる機会でもあった。

シンポジウムは中村安秀先生のコーディネートで、NGOの第一線で活動しておられる方々の、今が語られ、時間の経過が惜しいくらいであった。総会では、今年実施した役員選挙の結果が承認され、規定によって新たな理事が任命された。

このような大会に身をおくと、国際ボランティア学会が産声をあげてから、確実に育っていることを感じさせられた。まだまだ、ひよこの学会であり、課題は多い、若い研究者、新たな世代に引き継がれて発展していくことを感じさせる大会であった。大会を支えられた担当機関の大阪 YMCA ならびにボランティアの方々に心から御礼申し上げる次第である。

1. 第4回大会の報告

第4回国際ボランティア学会大会は、2002年10月27日(土)28日(日)に大阪 YMCA (大阪市西区)を会場として開催されました。自由研究発表、特別講演およびシンポジウムなど予定されていたプログラムすべて無事行われました。

以下、特別講演の要旨およびシンポジウムの報告を掲載します。

《特別講演・要旨》

「国際ボランティアの過去・現在・未来」

今井鎮雄 (神戸 YMCA 顧問・PHD 協会理事長・頌栄短期大学名誉教授)

2001年は国際ボランティア年であった。1997年に日本から提案され、賛同した123か国の共同提案となり、2001年を「国際ボランティア年」と決定した。1995年、阪神淡路大震災に多くのボランティアが日本各地から加わり、「ボランティア元年」といわれるほどボランティアリング(ボランティア活動)が注目を浴びたことが提案のきっかけになったのであろう。また20世紀を振り返る年として、多くの国々がボランティアゼーションに期待するところが大きかったからではないだろうか。

ボランティアの歴史は古いが、時代の流れの中で変遷があり、大きく三つの要素が付与されてきた。「時間の贈与」、「自由選択」そして「無償性」である。これらはいずれもボランティアリズム(思想)を明確に示すものである。しかし21世紀の社会の変動による社会構造の変化は、ボランティアとボランティアゼーションをあらたに問い直している。

ピーター・ドラッカーは「アメリカの人口の半分、二人に一人の男女がボランティアリズムを基礎とした非営利法人で働き、それは彼らにとってコミュニティとなっている」と言い、イギリスでは政府がボランティアの働きがどう活用されたかを検証、ロンドンのボランティア担当官のジョス・シェアードは、ボランティアの定義が揺れていると指摘している。理由の第一は、ボランティアの概念が不明確になったことであるという。有償ボランティアが増えるにしたがい、本来的なボランティアリズムの、自由な自己の意志で活動するボ



ランタリーなものから、行政の役割を補完するもの、という非難を受けるにいたるようになったことであり、第二はボランティアの人員の確保が難しくなったことによる危機を挙げている。両者はいずれも社会的な流れの中にボランティアリズムが埋没しかける状態から生まれたものであるが、これらの現状を踏まえて過去と未来を考えてみたい。

一例を挙げるとイギリスでは、1940年代に福祉国家の成立によって、健康サービスや福祉サービスは「行政サービス」に変わったが、60年代にはこの福祉国家のサービスを補足するためにボランティアの増強がなされ、「地位・援助の手引き」を出し、有償ボランティア、コーディネーターなどの任命が行われているし、1963年、学校のカリキュラムの一部に生徒のコミュニティー・サービスが加わっている。

1983年にボランティア・センターが各地区に置かれ、ボランティア担当官が配置されたが、ここでは先ほどのようなボランティアの定義が有償ボランティアの仕組みの普及によって、「賃金労働」と「ボランティア」との間にあった厳格な境界があいまいになったとの指摘があった。

このような状態ではボランティアな命が奪われてしまわないかという不安の兆候があって、その反省の中で1990年代からボランティアリズム（思想）と深く関わって、トラスト運動などが新たに生まれてきたのである。

日本のボランティアの先達として二人の方の働きを挙げたい。

1923年関東大震災の直後、その報告が神戸に届くと、賀川豊彦は「山城丸」(船)をして、物資と見舞金を積んで上京。隅田川のほとりで救護所、職業紹介、貸金庫等々の業務を始めた。賀川とそのボランティアたちは震災直後から復興への協力を行って世間の耳目を奪ったが、徳富蘇峰が新聞で賛辞を送っているのを見ることができる。阪神・淡路大震災の際、復興委員会の下河辺淳委員長が「神戸の震災に、賀川さんのような方が現れませんか」とおっしゃったそうだが、被災者の側に立つ人間的援助こそボランティアの働きなのである。

1981年、ネパールで18年間にわたり医療活動を行った岩村昇博士が、国際ロータリーの『国際協力賞』を受賞。それを記念して兵庫県から「PHD運動」が始まり、国内外で大勢のボランティアがこの運動に参加している。「人々の所へ行き、人々の中に住み、人々から学び、人々と共に計画を立て、人々と共に働こう。彼らが知っているところからスタートしよう」という岩村博士の言葉は、国際ボランティアの精神とその現実性をよく表している。

ボランティアリングが盛んになるにしたがいNPOの活動はいま花盛りで、多くのグループが生まれたことは周知の如くである。先述のように、このような現象は変動する社会構造と深く関わって現れたものだが、同時にその「あいまい性」が指摘されつつある。ことに福祉社会の形成について、国の福祉制度の充実を願う声は、ともすれば住民の主体性を蝕みかねない。西尾勝氏は、「『人権』、『自由』、『自立=自治』の三つが空洞化している共同社会は、福祉社会と呼ぶに値しない。自由な人間の主体的活動こそ重要であり、自由の課題はボランティアリズムの思想と関連する。福祉サービスは行政機関の専権事項ではなく、家族から国家機構にいたる重層的、多元的な主体によって担われねばならない」と言われている。これはボランティアリズムが行政の中に組み込まれることによる変質危機を訴えるものであろう。現在、このような中でボランティアリングが展開されているが、ボランティアな個々の意識とその行為責任を充分に負っているかが問われている。

さらに世界の変化は、日本の福祉社会に構造的な変化を迫っている。ピーター・ドラッカーは「この変化の中で、再び機能的な組織体制を世界が持つためには100年かかるだろう。その変化があらたな時代に機能するまで、その隙間をふさぐ役割をするのがボラ

ンティアである」といって、ボランティアこそあらたな時代の社会的サービスに責任を負うべきであろうと示唆している。

2001年9月11日、ニューヨークで起きた事件はアメリカの体制を大きく揺るがしつつある。自由の女神に象徴されるアメリカは「自由＝人権」の旗を、「安全(セキュリティ)」に切り替えようとしている。時代の流れと世界の混迷の中で、国際ボランティアが果たさねばならない役割と具体的な義務はなんであろうか。環境問題でイギリスにトラスト運動が起こったように、あらたな国際的なボランティア活動に対する役割を担うためにも問われる課題である。

世界が国益を中心として政治的・経済的転換を強めている今こそ、地球上に住む人間の共通な権利を保障し、ともに分かち合う精神を持つ人々が世界のどの地にも出てきて、行動を通してそれを証明していくことこそ、新たな世紀における国際ボランティアの仕事であろう。

〔執筆・今井鎮雄〕

《シンポジウム・報告》

「国際ボランティア活動の未来を創る」

パネリスト：板東あけみ（ベトナムの子ども達を支援する会）

藤崎智子（Health and Development Service: HANDS）

阿部俊彦（あしなが育英会：レインボーハウス神戸）

立野純三（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン）

コーディネーター：中村安秀（大阪大学大学院人間科学研究科）

海外の人的交流がますます活発になるなか、日本の市民社会が国際ボランティア活動に寄せる期待は大きくなっている。豊かな国の市民が貧しい国の人びとを手助けするという発想ではなく、いろんな国や地域の人びとが自立し豊かな生活を営めるよう市民レベルでの協働作業が求められているといえる。

今回のシンポジウムでは、国内や海外で活動している Non-Governmental Organization (NGO) や Non-Profit Organization (NPO) の方々をお招きし、実践活動や今後の



抱負を語っていただき、国際ボランティア活動と市民社会との今後のあり方について考えていきたいと考えた。

日本の教育や保健医療の現場での仕事と海外でのボランティア活動を両立している会員も多い「ベトナムの子ども達を支援する会」の板東あけみさんは、ベトナムでの障害児の生活支援や教育支援、母子手帳の導入などについて、現地の人びとと同じ目線で明るく活動する様子を報告した。保健医療システムづくりに関する専門家集団としての NPO「Health and Development Service (HANDS)」の藤_智子さんは、ブラジルやアフガニスタンでの活動の報告とともに、個人の自発性を尊重しつつ、自己満足や自己犠牲ではなく、双方向の気付きの重要性を強調した。日本での長年にわたる遺児支援活動の経験を活かしエイズ遺児やアフガニスタンの遺児支援など国際協力を開始した「あしなが育英会・レインボーハウス」の阿部俊彦さんは、親を亡くしたという共通の体験を持つ者がお互いに支えあう枠組みの大切さを訴えた。関西地域で最大の国際ボランティア団体である「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」の立野純三さんは、各国における団体活動の報告のあと、民間企業の経営者であり NGO 団体の理事長でもあるという立場から、理念の徹底、組織の維持、募金集めの重要性に言及した。

フロアの方々とのディスカッションでは、種々の興味深い議論が行われたが、ここではコーディネーターの個人的感想も交えて概括したい。このシンポジウムの発表や議論を通じて、今後の NGO には 2 つの方向性があるように思えた。一つは、確固とした組織や財政基盤を保持し、優秀な人材が専門的な仕事を継続でき（もちろん、給与などの待遇も含めて）、国際機関や各国政府と互角に渡りあえるような NGO/NPO。もうひとつは、決して規模の拡充を求めず、等身大の活動を維持し、開発支援を通じて自分たちも学ぶ姿勢を堅持し、日本の地域に還元する活動を行っている NGO。多くの人々が「ボランティア」という言葉で惹起されるイメージに最も近い NGO で、日本の地域に基盤をもち、多くの無償ボランティアが支える活動である。

また、活動目的、活動形態、組織のミッションや規模は異なっているとしても、募金などを通じた活動資金集めとスタッフや会員といった組織の維持が重要な課題であることが共通していたのも新しい発見であった。恐らく、今回発表していただいた NGO/NPO はいずれも非常に質の高い活動を維持していることが、共通点の多さにつながったのではないかと思われた。今後は、等身大の活動をしている NGO とプロフェッショナルな NPO が相互補完してお互いの長所を伸ばしあうような協働活動ができることを期待したい。

〔文責：コーディネーター・中村安秀〕

2. 第4回総会の報告

- 〔議題〕 2001年度および今年度の会員数と年会費の入金状況
 今年度の活動と来年度の活動計画および予算
 学会誌発行と編集委員会について
 隅谷三喜男賞選考結果について
 役員選挙結果について
 第5回の開催校について
 会則の改定について

2001年度の収支報告および今年度の会員数と年会費の入金状況

国際ボランティア学会 2001年度収支計算書

収入		支出	
摘要	金額(円)	摘要	金額(円)
繰越収支差	1,066,479	大会開催費	706,875
大会参加費・懇親会費・雑収入	216,500	通信費	17,100
年会費・学会誌収入	906,380	会議費	34,730
預金利子	540	その他・印刷費	131,204
合計	2,189,899	合計	889,909
		収支差額	1,299,990

資産の部		負債の部	
科目名		科目名	
流動資産		流動負債	0
現金	401,304		
預金		負債合計	0
郵便貯金	731,306	正味財産の部	
郵便振替口座	167,380	繰越収支差額	1,066,479
		当期収支差額	233,511
		正味財産合計	1,299,990
	1,299,990		1,299,990

・会員数

一般会員（含む学生会員） 264 名

法人会員 6 団体

・入金状況（10月25日現在）

2002 年度納入：83 名（187 名未納）

4 年未納：11 名

3 年未納：38 名

2 年未納：31 名

1 年未納：107 名

以上、報告および承認

今年度の活動計画と来年度の活動計画および予算

・2002 年度の活動

第 4 回大会

『ボランティア学研究』（第 3 号）の発行

ニュースレター（No.5 および No.6（予定））の発行

・2003 年度活動計画と予算（概算）

活動計画および予算	
第 5 回大会	70 万円
「ボランティア学研究」第 4 号発行	60 万円
ニュースレター発行（年 2 回）	2 万円
計	132 万円

事務局経費	
通信費	15 万円
謝金	12 万円
会議打ち合わせ費	10 万円
雑費	5 万円
計	42 万円

来年度活動予算 174 万円

以上、報告および承認

学会誌発行と編集委員会について

・学会誌『ボランティア学研究』（第 3 号）が発刊された。

会員以外には頒布価格 1,100 円（+送料）で配布する。

・新たに編集委員として以下の方にお問い合わせする。

森定玲子氏（プール学院大学）・本田真也氏（日本 YMCA 同盟）

・「研究ノート」を新しいカテゴリとして設ける。

以上、報告および承認

隅谷三喜男賞選考結果について

既報の通り、今年度は、選考方法を変更した。飯沼二郎選考委員の体調不良により、今井鎮雄選考委員を中心に、常任理事の補佐のもとで選考をおこなった。

結果は以下の通り。

- ・研究奨励賞：竹端寛（大阪大学大学院人間科学研究科）
『ボランティア学研究』vol.3 に掲載された「ボランティアとは言わないボランティア・福祉資源としての PSW」に対して。
- ・実践奨励賞：該当なし
以上、報告および承認
役員選挙結果について
- ・以下の通り、役員選挙にて 17 名が新理事として選出された。
 - 渥美公秀（大阪大学大学院）
 - 井口 延（日本 YMCA 同盟）
 - 内海成治（大阪大学大学院）
 - 内海愛子（恵泉女学園大学）
 - 榎田勝利（愛知淑徳大学）
 - 大江 浩（横浜 YMCA）
 - 大西健丞（ピースウインズ・ジャパン）
 - 川原啓美（愛知国際病院）
 - 坂口順治（平安女学院大学）
 - 鹿野幸枝（大阪 YWCA）
 - 島田 恒（関西学院大学）
 - 田中治彦（立教大学）
 - 新堀邦司（東京 YMCA）
 - 早瀬 昇（大阪ボランティア協会）
 - 村井吉敬（上智大学）
 - 山口 徹（神戸 YMCA）
 - 山崎美貴子（明治学院大学）

以上 50 音順

現在、承諾 14 名、否 2 名、未回答 1 名となっている。

- ・また、理事会で以下の 7 名の方に理事を依頼することに決定した。
 - 秋山胖（文教大学）
 - 入江幸男（大阪大学大学院）
 - 甲斐田万智子（子どもの権利センター）
 - 志水紀代子（追手門学院大学）
 - 遠矢良男（東京 YMCA）
 - 中田武仁（国連ボランティア大使）
 - 中村安秀（大阪大学大学院）

以上 50 音順

以上、報告および承認

第 5 回の開催校について

2003 年 11 月 8・9 日頃に横浜 YMCA でおこなうこととする。

以上、承認

会則の改定について

以下のように会則を改定する。

第 7 条【役員の任期】役員の任期は 3 年とする。ただし再任を妨げない。

〔理由〕

役員選挙を、3 年ごとに行うことにしたため。

以上、承認

3. 第3回隅谷三喜男賞について

第4回総会の報告にもあるとおり、今回の隅谷三喜男賞は以下のように決定しました。

- ・研究奨励賞：竹端寛（大阪大学大学院人間科学研究科）
『ボランティア学研究』vol.3に掲載された「ボランティアとは言わないボランティア・福祉資源としてのPSW」に対して。
- ・実践奨励賞：該当なし

なお、今年度より隅谷三喜男賞は、自薦他薦の候補者より選考することとなっています。詳しくは、事務局までお願いします。

4. 役員選挙について

2002年9月24日に、志水常任理事（追手門学院大学）立ち会いの下で、事務局が開票作業を行いました。結果は、第4回総会の報告の項参照してください。

5. 『ボランティア学研究』について

『ボランティア学研究』vol.3が発行されました。会員には無料で配布します。なお、頒布価格は1冊1100円＋送料です。詳しくは、事務局までお願いします。

6. 会費納入のお願い

学会運営は、基本的に会員皆様からの会費で支えられております。しかし、第4回総会の報告にもあるとおり、会費未納が多いため、学会の運営費に支障をきたすおそれが出てきています。是非とも、会費の納入をお願いいたします。

2002年度分の会費は以下の通りです。

〔年会費〕

一般会員：5,000円 / 学生会員：2,000円 / 法人会員：10,000円

なお、今年度新規に入会された方は、入会金も会費とあわせて納入してください。

〔入会金〕

一般会員：5,000円 / 学生会員：2,000円 / 法人会員：10,000円

なお、未納年数などを記した用紙と振込用紙を同封いたしておりますので、そちらをご参考の上、お振り込みください。

7. 事務局より

ボランティアや市民活動などに関する情報やエッセイなどがありましたら、お手数ですが学会事務局までお送りください。あわせて、紙面へのご意見・ご希望などもお待ちしております。

また、住所・所属等を変更された場合は、速やかに事務局までご一報くださいますようお願い申し上げます。